

ねんりんピック新聞

家 冒険 河野兵市

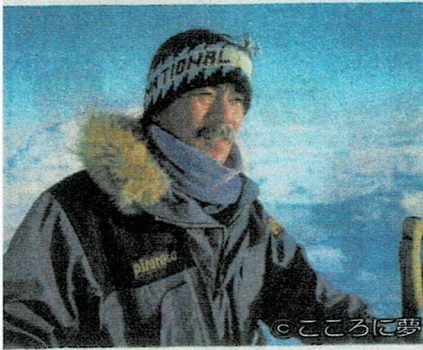
日本人初・北極点単独徒歩達成

家族が伝える「あきらめない強さ」

冒険家・河野兵市（1958〜2001）は佐田岬半島の旧瀬戸町（伊方町）出身。みかん農家で鍛えた強靱な肉体、何より「行ってみよう、やってみよう」という好奇心で、世界中を徒歩や自転車で駆け巡った。97年には日本人で初めて北極点への単独徒歩を達成。その帰りに遭難し、43歳で生涯を閉じた。長男の遼兵さんは没後20年の2021年より、兵市の生き様を伝える講演活動を開始。「冒険とは、一歩踏み出す勇氣の心」の言葉を残した。

兵市の旅は1978年にはじまる。会社を1年で辞め、自転車で日本一周1・6万kmを走破。10年後の88年には徒歩での日本列島縦断も達成している。この間、オーストラリア大陸自転車縦断、北米最高峰マッキンリー（6194m）登頂、南米大陸自転車縦断など旅先は数知れず。移動手段は徒歩・自転車・カヌーで、ほとんどが単独でのチャレンジ。時間さえあればアルバイトをかねもちし、資金にあてた。

87年にはヒマラヤのナンガパ



◎ここに夢

「単身赴任みたいで、寂しくはなかった。父は私の学校の話をよく聞いてくれてました。旅の話はほとんどなかったですね（遼兵さん）。順子さんは、馳走を作るわけでもなく、気張らず普通の家族の時間を大切に

ルバット（8125m）に挑戦。キャンプ地が雪崩に遭い、部屋一つほどの大きさの水が兵市を直撃、顔面27針の重傷を負った。

その時につきっきりで看病をしてくれたのが、炊事などの手伝いで現地に来ていた順子さん。2人の出会いだった。

遼兵さんは「身体表現として過酷な旅に挑む父を一番理解し、支えたいという気持ちが一番強いのが母です」と話す。

2人の子供が生まれた後も旅を続けた兵市。たまに家に帰っ

てきたときは一緒に飯を食へ、遼兵さんとお風呂に入り、トランプで遊んだ。

「単身赴任みたいで、寂しくはなかった。父は私の学校の話をよく聞いてくれて

ました。旅の話はほとんどなかったですね（遼兵さん）。

順子さんは、馳走を作るわけでもなく、気張らず普通の家族の時間を大切に



◎ここに夢

北極点へ向けソリを引く

何も無い真っ白を進む

北極は大陸ではなく水の塊。海流で常に動くため、地上に明確な北極点の目印はない。「自分が歩いた水は、今はもうなくなっているかもしれない」。そこに兵市はロマンを感じた。

実は北極の水の厚さは平均2mほど。「溶けると氷点下の海。常に氷の状態を見極めて進みます（遼兵さん）。水どうしがぶつかり、岩場のような起伏が多く、足場も悪い。目の前は真っ白で目印もなし、手元のGPSの数値だけが頼り。北風は常に向かい風で、水ごと海流を押し

戻されるので、1日で進む距離は6km程度だそうだ。

兵市は日記をこまめに付けていた。「北極点には希望という言葉はない。希望という言葉は考えただけですらなくなる。希望を持つことが自分の気持ちを駄目にしてしまう。でも、ネバーギブアップ、あきらめないことだ。自分の冒険は前に進むしか終わらない。進め」。遼兵さんが好きな言葉だ。

冒険開始から2カ月後の97年5月2日、ついに単独徒歩で北極点へ到達。世界3人目、日本初の偉業だった。到達の瞬間、GPSで位置を確認しソリに腰を掛け、紅茶を飲んだ。見上げるとブルースカイが広がっていた。「よかった」という安心感。満足感だけがあった。

次の目的地は1・5万km離れた地元・瀬戸町への「リーチング・ホーム」。ところが、北極点から700km進んだ場所でもクレーバスに落下。その後、遺体が発見された。当時、小学2年生だった遼兵さん。家族全員で力



◎ここに夢

「家ではごく普通の父」と遼兵さん（4歳当時）



リーチング・ホームの最終到着予定地・佐田岬半島瀬戸農業公園には記念碑が。手前に兵市氏の足型



◎ここに夢

遼兵さん。スポーツメーカーテイングの会社に勤めながら、兵市氏の遺志を継ぐ「ここに夢」を順子さんと設立

ナダへ行き、父、兵市と対面した時に、ようやく亡くなったことを実感したという。「それでも普段通りの学校に行き、変わらない生活が続けられるよう気丈にしていた母の姿を覚えています」。

没後20年の節目に愛媛県初の企画展を開催。遼兵さんが講演活動を始めるときかけとなった。企画展を記念し絵本「おうちへ帰ろう」（非売品）を自費出版。兵市が旅の道中に構想した童話のアイデアを、順子さんと遼兵さんが形にした。

「自分も仕事で難しいことがあると、ついでにできない理由を探してしまつ。そんな時に父の言葉『冒険とは、一歩踏み出す勇氣のことだ』が響いた」と遼兵さん。父の活動を聞いて、少しでも元氣、やる気が出たという人がいれば嬉しいという。